# 改元の暴くもの　―大正末～昭和初期における女性皇族の表象をめぐって―

茂木　謙之介

## What change the name of an era reveals: a study on representation of female royals from the Taisho Era to the Showa Era

Kennosuke MOTEGI

***Abstract***

A large number of studies have been conducted regarding the role of the empress in modern Japan. However, most of them have overlooked the change in representation of Princess Nagako (Empress Kōjun) from the Taisho Era to the Showa Era. The purpose of this paper is to analyze the topic through studying *Fujokai*, which is a famous women's magazine in modern Japan. It concludes that the change of era shifted the representation of the empress from diverse modern girl to stereotyped "Mother of the Nation". The change of era consequently exposes the weakness of the emperor system.

***Keywords: royals in Modern Japan, magazine, Fujokai, Princess Nagako (Empress Kōjun), Kan KIKUCHI***

### はじめに

本稿の目的は、昭和改元前後の女性雑誌を中心とした諸メディアにおける皇族の表象について、特に皇太子妃良子／香淳皇后（以下「良子」と表記）の図像イメージを中心に検討し、改元という出来事が近代天皇(制)にとっていかなる意味を有したものであったのかを問うことにある。

夙に指摘されるように同時代、天皇・皇族たちの姿は恒常的に諸メディアにさらされていたが[1]、その中でも大正から昭和にかけての良子は、久邇宮邦彦王の第一王女として生まれ、一九二四年に裕仁皇太子と結婚、一九二六年には皇后に即位するという略歴からも明快なように、皇族女子から皇太子妃、そして皇后へと立場を変化させた人物であり、その背景には婚姻および改元という天皇・皇室をめぐる時代状況が存するなど、本稿の問題関心に対する検討対象として最もふさわしい人物である。

近代皇后の表象を対象とした先行研究としては、若桑みどりの研究が著名である[2]。若桑は昭憲皇太后の良妻賢母的イメージの展開を検討するとともに、皇

后が女性の国民化のための規範的存在としてあったこと、またそれらの諸表象が日本神話と接続されていたことを明らかにした。近代皇后の中でもとりわけ良子については、近年その研究成果が厚くなりつつある。近代の皇后たちを通史的に扱った片野真佐子は良子の表象について、一九二〇年代では良妻賢母かつ嫁として描かれ、愛国婦人会への参画などは近代皇后の役割を踏襲するものであったと位置付け、一九三〇年代以降は軍事色が強化されると指摘している[三]。原武史は戦時期における「慈母」としての良子のイメージについて言及するとともに、大正天皇の妃であった節子との葛藤について論究している[四]。

これらの先行研究を踏まえた上で、特に本稿の問題関心にかかわる重要な研究成果として森暢平と河西秀哉のものが挙げられる。森は良子による結婚前のメディア露出によって新中間層の女子を中心に憧れの対象となっていたことを指摘し、その背景として生活改善運動との連関があったことを論じている[五]。また河西秀哉は家庭内の母としてのイメージと戦中期における「国母」としての表象について指摘するとともに、良子に対しては戦中も洋装であることへの批判が寄せられたことを論じている[六]。

両論では良子のイメージが、大正期の「モダンガール」から昭和期の「国母」へ変容を遂げたことが共通して述べられているが、ここには三点の問題が未済のものとして残されている。まず、この「国母」へのイメージの変化について、両論共にその画期が一九三〇年代の総力戦体制成立に求められており、改元即ち良子の立場上の移行期については状況解明がされていないこと、次に「モダンガール」や「国母」の指し示す物語内容が十分に検証されていないこと、そして良子と同時代に展開していた同世代の女性皇族の表象との比較がなされていないことである。

この問題意識のもと、以下本稿では、女性雑誌を中心とした大正後期～昭和初期の皇室・皇族の表象について、『アサヒグラフ』等を比較・参照しつつ、主に雑誌『婦女界』を検討したい。

雑誌『婦女界』は商業的な女性雑誌の草分けとして知られている。初期の編集協力者は羽仁吉一・もと子夫妻であり、一九一三年一月からは都河龍が雑誌を譲り受け、長編の連載小説を重視するようになる。小栗風葉や小山内薫、菊池寛などが作品を寄せたが、『主婦之友』や『婦人倶楽部』におされて生彩を欠くようになり、一九四三年四月号で休刊、一九四八年一月に復刊するが、途中の休復刊を経て一九五二年一一月に終刊する[七]。前掲の森論では同時代の女性雑誌の中でも突出した女性皇族関連記事の多さが指摘され、とりわけ成婚に先立って一九二三年に久邇宮家が一家で行った関西旅行に際しては同行密着取材を行い、特に良子の表象が大量に生成されたことを分析している[八]。かかる皇室報道との親和性がその後も継続していたことは一九二五年一月号表紙において全く必然性のない皇居の二重橋が新年を寿ぐ図像として設定されていることなどからも窺えるといえよう〈図1〉。

〈図1〉『婦女界』1925年1月号表紙

〈図2〉「御勉強室に於ける規宮様」（『婦女界』1924年6月号）

この『婦女界』の皇室・皇族記事については、大阪毎日新聞の記者が「宮家の大奥にまで取入つてゐる」雑誌として、一九二三年の久邇宮家の関西旅行への密着取材を行う同誌を恐れているのみならず[九]、一九二四年六月号では、梨本宮邸の一室で勉強中の規子女王を撮影するとともに、「殿下はこのお写真をご覧になつて「一寸学者の様にとれてるわねえ」と仰せられました」と女王本人と直接会話を交わしている[一〇]〈図2〉。また一九二七年一月号では臣籍降下した旧皇族である山階芳麿との間で以下のようなやり取りが交わされている。

写真は一体にお嫌ひで滅多に写させられませんが、今日はどういふ風の吹き回しかすぐ「ウン、婦女界か、承知した」とお気軽に仰しやれた（略）記者が「そこでチョツトお笑ひを」と申し上げましたら、「難しい注文だね、そんなこと出来ませんよ」といひながらお笑ひになつた瞬間をシヤツターに納めました。[一一]

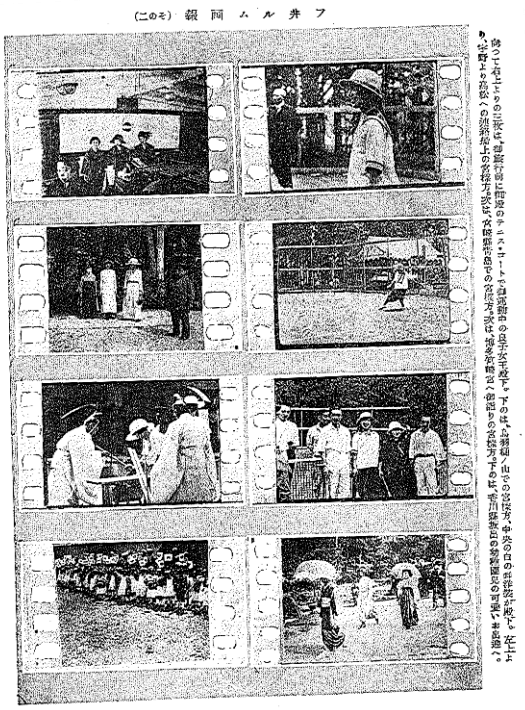
同一記事では同じく臣籍降下した旧皇族である清棲敦子の部屋に『婦女界』が置かれていることも言及されるなど、旧／皇族本人との間に直接の関係を持つという同時代では特異といって差し支えないほど特権的な立場に同誌があったことが窺えよう。以上のメディア的な背景を踏まえつつ、次章以降、詳細に改元前後の良子の表象を検討したい。

## 第一章　大正末の良子表象

まず注目したいのは前掲の森論でも言及のあるモダンガールの表象である。〈図3〉では良子のテニスに興じる姿が、〈図4〉では関西旅行中に破顔する姿が写されている。坂本佳鶴恵の研究で指摘されるように同時代に皇族妃のドレス姿が減少し、女優中心の未婚女性へシフトしているメディア状況の中で[一二]、良子は数多くのかつ自由闊達な在り様を示しており[一三]、それは〈図5〉の『アサヒグラフ』の成婚記念号における良子の表象にも適用できるように、ある程度共有されたイメージであった。

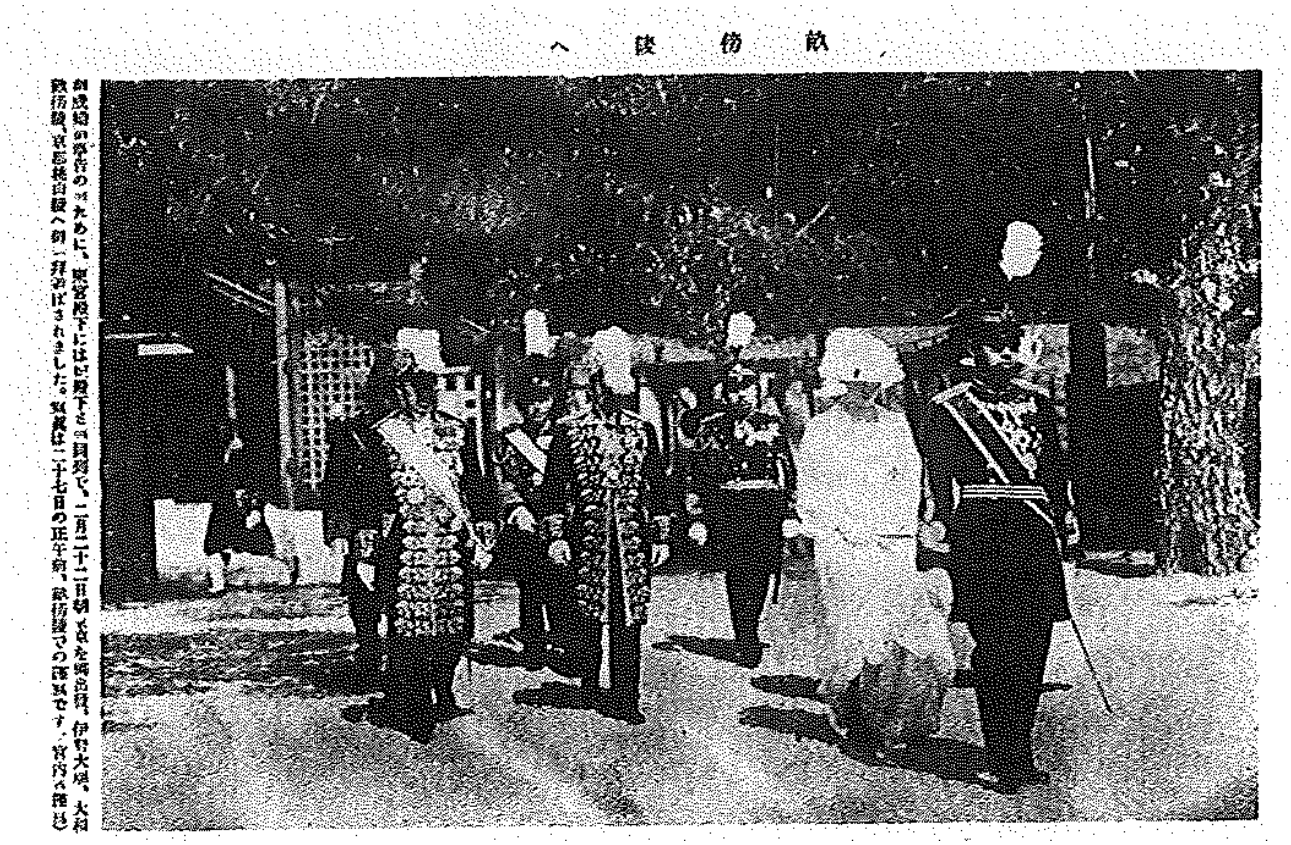
これが少しく変化を被るのは一九二四年の裕仁皇太子との婚姻である。この

〈図 4〉「フキルム画報その二」(『婦女界』1923 年 3 月号)




〈図 3〉「フキルム画報その二」(『婦女界』1923 年 3 月号)

〈図 5〉「優しき御女性としての良子女王殿下」(『アサヒグラフ』1924 年 1 月 23 日号)




〈図 6〉「畝傍陵へ」（『婦女界』1924 年 4 月号）

〈図 7〉『婦女界』1924 年 4 月号表紙

変化については二人の結婚に関する記事が複数にわたって収められている『婦女界』一九二四年四月号を取り上げ、良子についての記事と他の記事と対照しつつ検討を加えたい。

いうまでもなく一冊の雑誌は一つの冊子体として読者の前に提示されるものであり、読者はその中に含まれる一つの記事にとどまらず同一冊子に含まれるすべての内容を並行的にかつ最新のものとして享受する。それゆえ、一冊の雑誌はその前後の同一メディアとの間に連続性を有するのみならず、その一冊のみでも独立したテクストとして提示されているということができる。同一雑誌の固定的な読者たちは、それまでに同一雑誌によって提示されていた情報群をコンテクストとして共有したうえで、最新号に提示されているテクストを読み解くが、同時にその一冊のみを手に取った読者と同じく、同一号を横断的に読み、相互の情報の連関をそれぞれに受け止めもする。よって、一冊の雑誌における特定の表象はその一冊の雑誌内で他に展開している諸表象と何らかの関係

性を結んでいるのであり、一つの表象を分析するに際しては同一雑誌の同一号を横断的に検討することが求められるのである。

一九二四年四月号における良子の表象としては〈図6〉で皇太子とともに畝傍陵に結婚の報告をする姿が確認できる。これは良子が天皇家の一員となったことを端的に示すものといえるが、その報道は同号における他の様々な表象によって補強されている。例えば〈図7〉に掲げた同号の表紙は、和田英作による「三保の松原」であるが、富士山と松原の前に立つ女性は、ティアラとネックレスをつけた近代女性皇族の表象に近似したものとなっている[一四]。特にこの表紙の女性が片方の乳房を露出していることは追って皇嗣を生む母となることを求められる良子の姿を暗示したものともいいうるだろう。他にも同号では「御慶事記念の福袋を携へて愛読者訪問競争愈々始まる」という広告が提示されているように、皇太子と良子の成婚を記念した懸賞が行われるなど、号を挙げてかかる出来事を寿いでいるように見える。

〈図8〉「現代的花嫁姿」（『婦女界』1924年4月号）

この皇室内の婚姻についての記事とともに、同号で目立つのは結婚にかかわる諸記事である。同号では特集として「結婚打ち明け話」が組まれる。〈図8〉や〈図9〉のように同時代の最新の結婚風俗についてのグラビア写真が掲載され、座談会「媒妁結婚か自由結婚かの批判」では中村武羅夫、菊池寛、久米正雄、岡本一平、三輪田元道、中村古峡、豊原清作、嘉悦孝子、九条武子、三宅やす子、都河竜、太田菊子、久我通らが「媒妁結婚か自由結婚か」を論じている。この特集の中で注目したいのは野上俊夫による文章である。

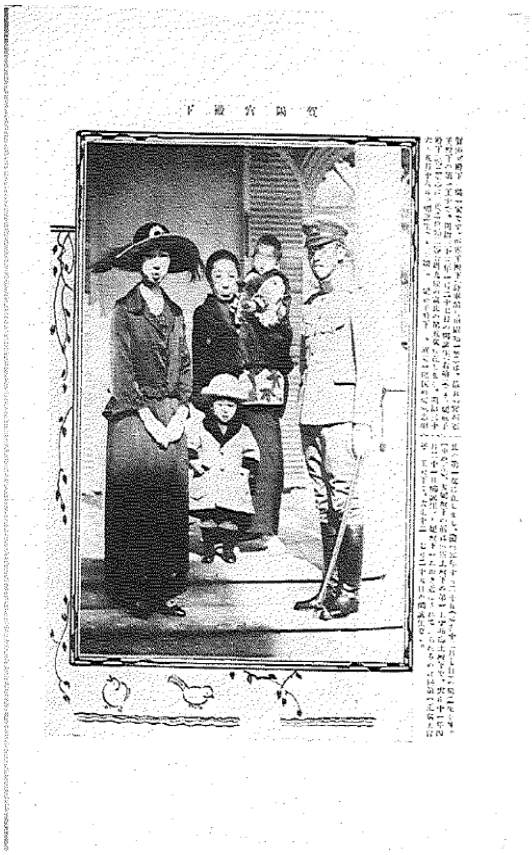
新しい時代に目覚めた青年たちが、其の配偶を選ぶときに、在来のやうな因習の圧制の下に屈服せず、自らの意志を以て自由に選択した人と結婚しようと望むことは、極めて当然であり又極めて望ましいことである。現在の実際の傾向から云つて、圧制的結婚が次第に廃れて自由結婚が次第に多くなり行くことは大体に於て甚だ喜ぶべきことである。[一五]

〈図9〉「神前結婚式の盃事」（『婦女界』1924年4月号）

ここでは自由結婚が称揚されているが、同号で寿がれていた皇太子と良子の婚姻が皇室内部での結婚だったことを考えると、それとのあいだに齟齬を生む可能性があると言えるだろう。先行論では近代以降のメディアにおける天皇皇后像について、「近代的な夫婦」像を人びとに示す模範的な表象として説明されてきたが[一六]、ここには皇室の婚姻をメディア内において「理想」と一元的に回収することの困難が立ち現れている。この点については後ほど三章で再び触れたい。

婚姻後の良子の像は急速に単純化してゆく。〈図 10〉では婚姻後の散歩姿をスナップで撮影されているが、このような夫婦像は〈図 11〉にあるような同誌

〈図 10〉「内外時事画報」（『婦女界』1924 年 10 月号）



賀陽宮殿下

〈図 12〉「賀陽宮家」（『婦女界』1925 年 7 月号）

平和

〈図 11〉「平和」（『婦女界』1925 年 2 月号）

におけるアッパークラスの夫婦においても、また〈図12〉にある通り他の皇族においても共有されるような紋切型の反復であった。

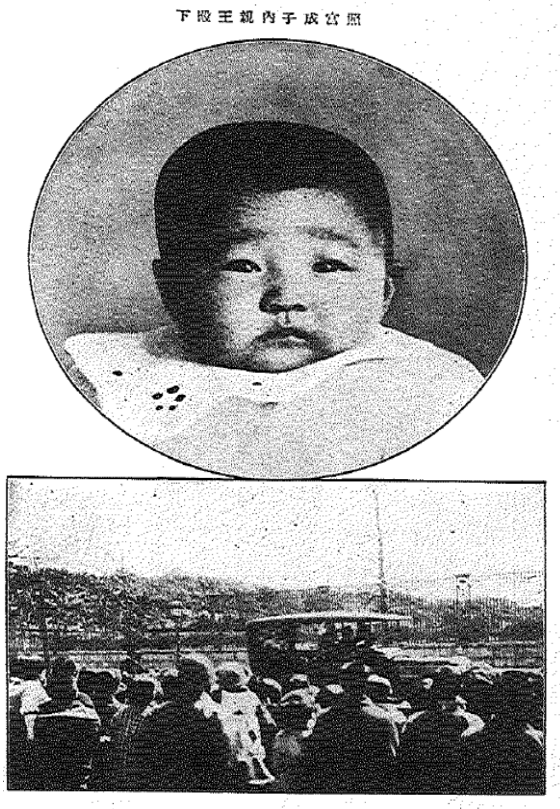
なお、同時代の皇族の図像については、青木淳子がモダニズムの牽引主体としての皇族妃が大衆メディアを通じて西洋化をアピールしたとの見解を提示しているが一七、『婦女界』においては〈図13〉などの和装の皇族たちの表象も提示されており、一種の「伝統的」かつ一般的な家庭像の在り様として解釈することができる。いわば皇族の表象は国民生活の多様性の反映としても成立していたのである。

〈図13〉「東久邇宮家」(『婦女界』1925年7月号)

さて、一九二六年に良子と皇太子のあいだには第一子の照宮成子内親王が生まれる。その際に登場するのは、「母性の典型」として良子を扱う言説である。

来たるべき日本の女性達が、歩み行く途の光として、成子内親王の健やかな御生立ちを仰ぐことは、もとより云はうようの無い幸福でせう。が、現在の女性達が、母性の典型として聡明な、恵み深い東宮妃殿下を仰ぐことの出来るのもまた幸福でなければなりません。殿下には、疾に母性の使命の重い事を思はれ、御自分の御乳で内親王を養はれ、もしくは御養育の日記を認められるなど、一に新時代の母たるものの務めを完全に国の女性に示されようと努力されて居ます。位が尊く栄える方々に、悩みが無いと思はゞ大きな間違ひです。尊く栄える方々が、その尊く栄えるために、なをと悩まれるのは日本の皇室の方々です。いかに国民の貧しい者までに、自分を同化し、御自分達の真意を徹底しようかと努められる御悩みは、恐らく我々の想像する以上の深いものがあるのです。一八

なお、この第一子誕生をめぐってはメディアのスクープ合戦が生起し、メディア消費の対象として皇族表象があったことを示すものとなっている一九。楠谷遼が指摘するように、同時期は皇族写真の撮影規範が緩和されており、様々な




〈図14〉「照宮成子内親王殿下」(『婦女界』1926年2月号)

消費の欲望が皇族たちに向けられていた[二〇]。それを端的に表すものとして〈図14〉がある。

宮内省貸下の成子の写真は画面下部に配置された人びとの寿ぐ姿と組み写真にされることによって、国民からの祝福と承認を受ける様相を表象しているといえるが、この報道に先立ち、良子の懐妊を報じた直後の一九二五年八月号で〈図15〉のように乳幼児が組み写真で提示されていたことは注目に値する。

〈図 15〉「愛児アルバム」(『婦女界』1925 年 8 月号)

即ち同誌では将来天皇となる皇嗣の誕生を期待して、あらかじめ斯かる類似した図像を用意しておき、追ってその期待の地平が満たされていったと考えることが出来るのだ[二一]。これらの期待の記事とそれに応答する表象というのは、消費の欲望を受け止めるものとしての皇族の在り方を提示するとともに[二二]、同時にかかる欲望は直系男子にのみ皇位継承を求める近代天皇(制)の性質と、それが決して安定的に運用されていたわけではないという問題をもまた顕在化するものともなっていたと考えられる。その状況は改元を機により明確となる。

## 第二章　改元後の動向

結論からいえば、改元を経て皇后となった良子の表象についての特徴的な様相はイメージの想起と平板化とまとめることができる。大正天皇の大喪を扱う『婦女界』一九二八年二月号で久我通は以下のようにかつて執拗な取材を行った『婦女界』による皇太子妃時代を想起する。

> 関東大震災の直後、本社が多大の犠牲と危険とを冒して撮影した炎上中の帝都の実況フイルムを、赤坂東宮御所で台覧に供へた節、記者もその席に列り、殿下から御直々に「今晩は活動写真を見せて貰つてありがとう」との優渥なるお言葉を頂戴したあの時の　東宮殿下、及び、久邇宮良子女王としての越後の赤倉へ御避暑中、特派記者として約半ヶ月に亘つてお伴申し上げ、数々のお写真を写させて戴いたあの時の姫宮様が今や「われ等の陛下」とならせ給ふたのです。記者はゆくりなくもあの時のことを思ひ出して、尊さに身を震はせました。[二三]

同号ではほかに太田菊子が「屢々徹宵御看護遊ばされた御疲れにや、ヴエールを通して拝する御顔面に稍々御疲れの色を拝し奉れど、皇后陛下としての御威徳は溢れ、嘗ての日拝せし東宮妃殿下とは、一段気高く拝し奉るのでございました」として皇后に「御威徳」を見出し[二四]、小野縣人は「御召自動車の前に、遥かに御姿を現はし給うた新天子と新皇后宮の御尊容は、微かにせまり来る暮霞の中に神々しくも拝された」として「神々し」さを提示するなど[二五]、具体性の欠如した、かつ聖化された平板なイメージが提示されてゆく。

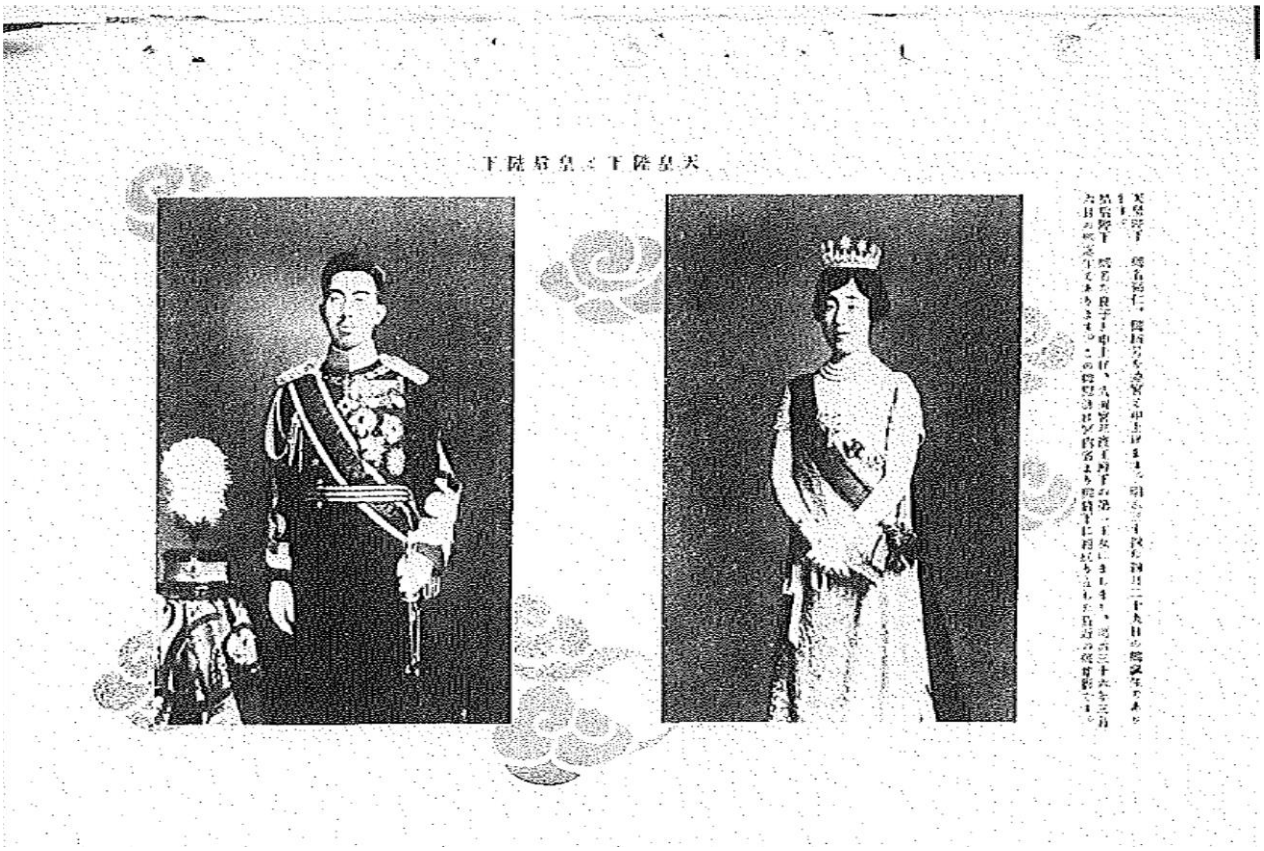
なお、この大正天皇の大喪について『婦女界』で見過ごすことができない記事がある。大喪を特集した翌月号にあたる一九二八年六月号の編集後記「編集室より」では、以下の様な言説が確認できる。

皆さまお喜び下さい、私共の異常なる努力の効は幸ひにして空しからず、前号は到る所大好評で、素晴らしい売行でした。／それは御大喪の記事を完全に掲載し得たのは、多くの婦人雑誌中、単に本誌あるのみであつたからでした。二六

ここでは大正天皇の大喪についての記事を完全掲載したことによって好評を博し、結果雑誌が売行好調であることについて読者に喜ぶよう促しているのである。見方によっては一種不敬ともとれる言辞からは、『婦女界』にとっての皇室・皇族記事が単なる商材にすぎなかったことを照射するともいえるだろう。

〈図 16〉「御大典に因んだ束髪四種」（『婦女界』1928 年 9 月号）

さて、いま一度改元直後の良子表象に戻りたい。改元後同誌において良子表象は急速に縮退していく。例えば一九二八年の即位大礼に際しても、〈図 16〉




〈図 17〉「天皇陛下と皇后陛下」（『婦女界』1929 年 1 月号）

のように大礼にあわせた最新の髪型が紹介されているなど具体性は乏しく、良子についての表象についても〈図 17〉ではいわゆる「御真影」が、〈図 18〉では大正期の皇太子妃時代の写真が流用され、一九二九年一月号の清浦圭吾「御帳台に登らせ給ひし皇后陛下の御姿を拝して」でも、読者投稿「栄え行く家」との同時掲載によって大礼を寿いでいるものの、良子個人については特段の具体的な記述はなされていない。これは一つには『婦女界』がそれまで宮家との関係を形成することによって特権的な写真を手に入れることに成功してきており、より規範の厳しい天皇家には接近が困難だったという個別具体的な問題があった可能性が考えられようが、同時にこのことは、それまで皇族としてあったがゆえに生まれ得ていた自在な表象が、彼女が皇后になることによって困難なものとなっていくことを意味しているともいえるだろう。

ただし、そのうえで『婦女界』以外の雑誌を見渡すと、イメージのバリエーションは少ないものの、良子の皇后としての表象は先代の貞明皇后との間に差

〈図 18〉「皇室の御栄え」（『婦女界』1929 年 11 月号）

〈図 19〉「聖上皇后両陛下御真影」（『アサヒグラフ』223 号、1928 年 2 月 15 日）

〈図 21〉「皇后陛下赤十字社総会へ行啓」（『アサヒグラフ』164 号、1927 年 1 月 1 日）

〈図 20〉「皇太后陛下」（『アサヒグラフ』164 号、1927 年 1 月 1 日）

異化が試みられているようにも思われる。例えば〈図 19〉に掲げたようないわゆる御真影でも良子は非常に密やかながらも笑みを浮かべており、それは〈図 20〉にあるような表情に乏しい貞明皇后との差異として見て取ることができる。また、近代皇后の慈恵主義的側面としてこれまでも指摘されてきた赤十字社への関りを報じる〈図 21〉では明らかに笑顔の皇后像が提示されており[二七]、いわば改元による画期の設定に伴って、従来とは異なる新たな皇后像の模索が行われていたかとも考えられるが、これについては別稿を期したい。

以上のように良子の表象が平板化していく状況の中で、それに代わるかのように浮上してくるのが松平節子と男性皇族たちである。

松平節子は、昭和天皇の弟宮である秩父宮雍仁と一九二八年九月という即位大礼の直前に結婚することとなる人物なのだが、【表】を一瞥して明快なように、彼女についての報道は一九二八年に急浮上し、それまでの良子のそれに取って代わってゆく。では、彼女の何がそれほどに人びとに受けるものとして位置付けられたのだろうか。一九二八年三月号で水上逸造は節子の人となりについて以下のように紹介する。

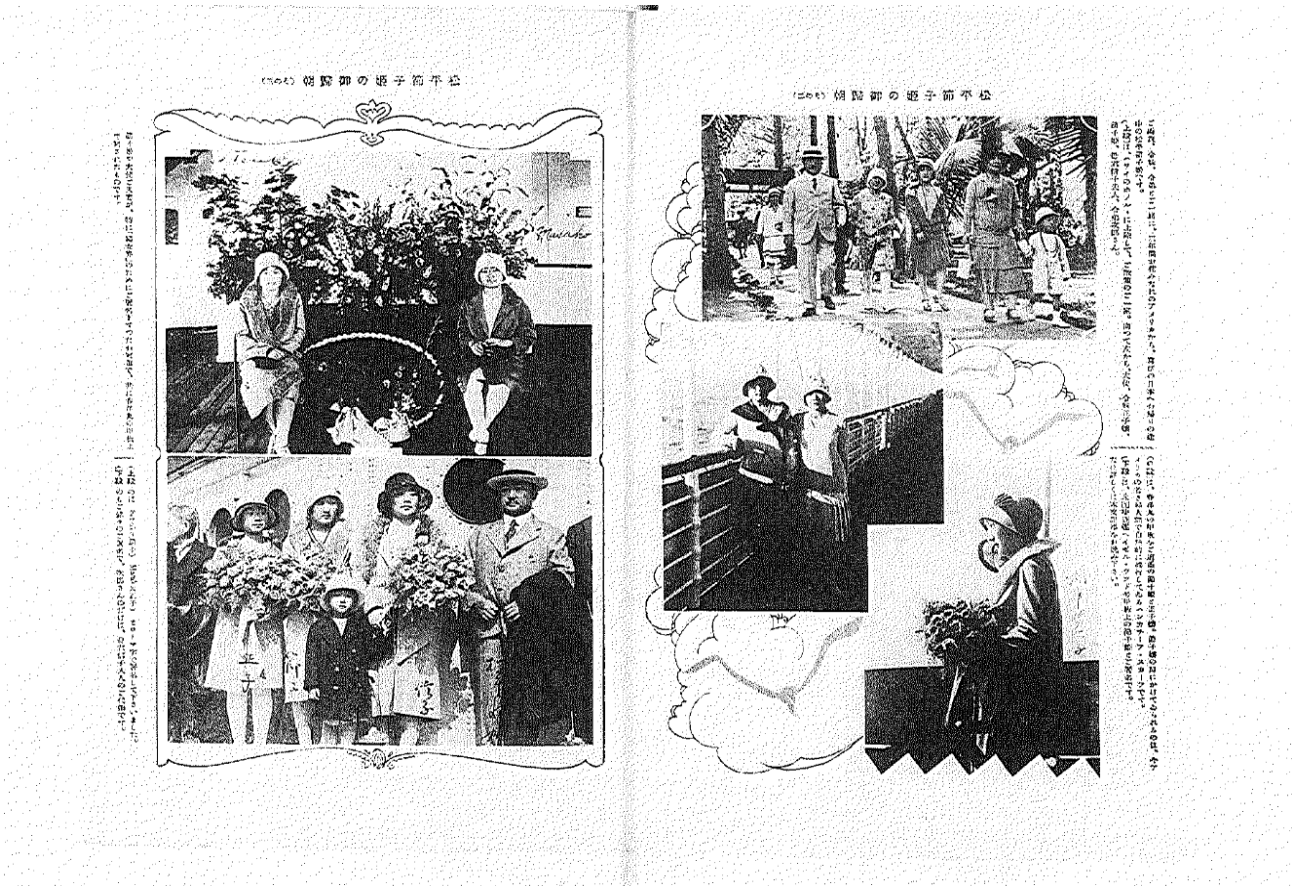
> 秩父宮殿下と、大使令嬢とは云へ一平民松平節子嬢とのご婚約ほど、皇室と国民との親しみを、形の上にも精神的にも、表徴するものはありますまい。実にこの一事は皇室におかせられて、下国民を如何に慈しまれ、信ぜられるかを雄弁に物語るのであります。（略）異つ国に咲く大和撫子一輪、かた時も故国に本を忘れない節子嬢こそ正に「桜咲く国の女王」であらう。
>
> 二八

ここで重要なのは彼女の聡明・倹約・健康・留学などのエピソードによる「新しい女性」としての様相とともに、平民出身という側面である。周知のとおり旧皇室典範において皇族の婚姻相手は華族以上であることが定められていたの

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 8 | 皇太子妃良子 | 公的場面 | ○ | | 成婚祝賀会参加。皇太子同伴。 |
| | | 久邇宮妃俔子・信子女王・智子女王 | 公的場面 | ○ | | 提灯行列に応える久邇宮一家。 |
| | 10 | 皇太子妃良子 | スナップ | | | 福島県行啓中。皇太子同伴。 |
| | 12 | 貞明皇后・東伏見宮妃聡子・竹田宮妃昌子・北白川宮妃房子・賀陽宮佐紀子・東久邇宮聡子・李王妃方子 | 公的場面 | | | 国産品奨励展覧会訪問。 |
| | | 皇太子妃良子 | 公的場面 | | | 絵画展訪問。皇太子同伴。 |
| 1925 | 2 | 貞明皇后 | 公的場面 | | | 御陵参拝。 |
| | 5 | 貞明皇后 | 肖像 | | | |
| | 6 | 北白川宮美年子女王・佐和子女王 | スナップ | | ○ | 日常生活。 |
| | 7 | 貞明皇后・皇太子妃良子他 | 肖像 | | | 全皇族の肖像。 |
| | 9 | 梨本宮妃伊都子・規子 | スナップ | ○ | | 婚前旅行。梨本宮・山階宮同伴。 |
| 1926 | 2 | 東伏見宮妃周子 | 公的場面 | | | 学校視察 |
| | 5 | 照宮成子内親王 | 肖像 | | | |
| | | 皇太子妃良子 | スナップ | | | 宮中への移動。 |
| | | 貞明皇后 | 公的場面 | | | 宮中での養蚕。活動写真切り取り。 |
| | 9 | 閑院宮妃直子 | スナップ | | | 御陵参拝。春仁と同伴。 |
| 1927 | 1 | （三条信子・大谷智子・清棲敦子） | スナップ | ○ | | 旧皇族・山階芳麿も掲載。 |
| | 2 | 貞明皇后・香淳皇后他 | 肖像 | | | 大正天皇崩御関連。 |
| | | 照宮成子内親王・東久邇宮妃聡子・竹田宮妃昌子・北白川妃房子 | スナップ | | | 大正天皇見舞い。 |
| | 3 | 閑院宮妃智恵子 | 肖像 | | | |
| | | 竹田宮妃昌子 | スナップ | | | 大正天皇大喪。 |
| | 7 | 李王妃方子 | 肖像 | | | |
| | 8 | 照宮成子内親王 | スナップ | | | |
| 1928 | 3 | （松平節子） | 記念撮影 | ○ | | 人物紹介。 |
| | 8 | （松平節子） | 記念撮影 | ○ | | 帰国後家族同伴。 |
| | | （松平節子） | スナップ | ○ | ○ | 外遊中。家族同伴。 |
| | 9 | （松平節子） | スナップ | ○ | | 会津旅行。家族同伴。 |
| | 11 | 香淳皇后他 | 肖像 | | | 全皇族の肖像。 |
| 1929 | 1 | 香淳皇后 | 肖像 | | | 十二単姿。天皇と同一ページ。 |
| | 11 | 香淳皇后・照宮成子内親王ほか | 肖像 | | | 久宮誕生のニュース。昭和天皇（皇太子）同伴。 |
| | 12 | 秩父宮妃勢津子ほか | 公的場面 | | | 青年体育体育大会台臨。天皇、秩父宮、高松宮ほか同列。 |

【表】『婦女界』における女性皇族表象（1923年分までは森2016を参照、その後は茂木謙之介作成）

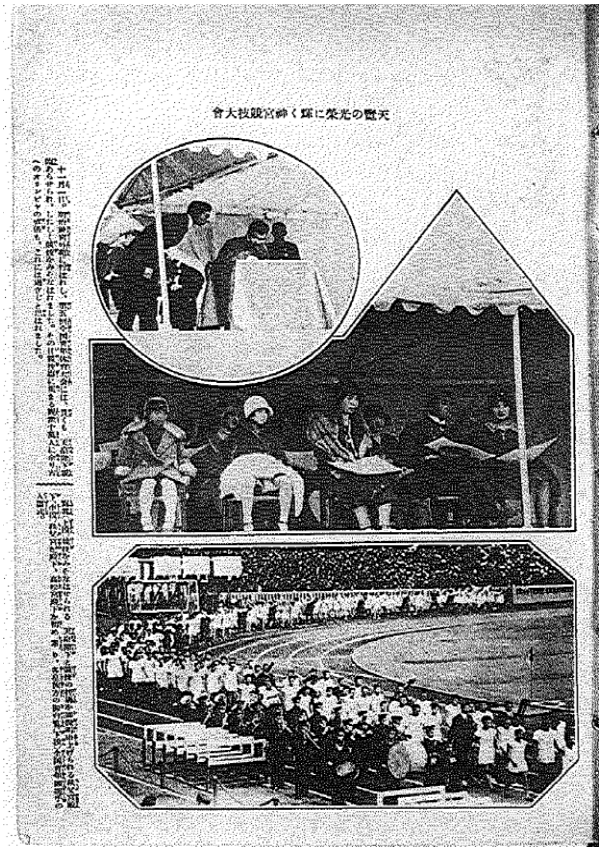
| 年 | 月 | 人物 | 写真形態 | 結婚関連 | 笑顔 | 内容 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1918 | 2 | 東久邇宮妃聡子 | 肖像 | | | |
| | 3 | 久邇宮良子女王・信子女王 | 肖像 | ○ | | 久邇宮智子女王も同一ページ内。 |
| | 5 | 久邇宮妃倪子・良子女王 | 公的場面 | | | 入京時の東京駅。邦彦王も同伴。 |
| | 7 | 東伏見宮妃周子 | 記念撮影 | | | 閑院宮寛子、華子女王同伴。 |
| | 9 | 梨本宮妃伊都子・方子女王 | 記念撮影 | | | 規子女王同伴。 |
| 1919 | 1 | 梨本宮方子女王 | 肖像 | ○ | | 李垠との結婚を前に。同一ページに李垠の肖像も掲載。 |
| | 4 | 東伏見宮妃周子 | 公的場面 | | | 東伏見宮と同伴で晩餐会へ入場。 |
| | 6 | 竹田宮妃昌子 | 肖像 | | | |
| | | 閑院宮妃智恵子 | 公的場面 | | | 閑院宮と同伴。見舞い帰り。 |
| | | 梨本宮妃伊都子 | 公的場面 | | | 弔問からの帰邸。 |
| | | 竹田宮妃昌子ほか | 公的場面 | | | 葬儀の行列。 |
| | 7 | 貞明皇后 | 公的場面 | | | 東京奠都50年。馬車上から。 |
| | 9 | 東伏見宮妃周子・久邇宮妃倪子・梨本宮妃伊都子 | 公的場面 | | | ＷＷＩ鹵獲品の台覧。 |
| 1920 | 1 | 梨本宮妃伊都子 | 公的場面 | | | 入京時の東京駅。 |
| | 6 | 李王妃方子 | 公的場面 | ○ | | 出京。李垠同伴。 |
| | 12 | 久邇宮良子女王・信子女王・伏見宮敦子ほか | 公的場面 | | | 創建の明治神宮参拝。 |
| 1921 | 5 | 久邇宮妃倪子ほか | 公的場面 | | | ＷＷＩ鹵獲品の台覧。 |
| | 6 | 朝香宮妃允子 | 肖像 | | | |
| | 7 | 梨本宮妃伊都子 | 肖像 | | | |
| | | 梨本宮規子女王 | 肖像 | | | |
| | 10 | 久邇宮妃倪子・良子女王・信子女王・智子女王 | 記念撮影 | | ○ | 家族と記念写真。邦彦王同伴。 |
| 1922 | 5 | 貞明皇后 | 公的場面 | | | 九州行啓。 |
| | 6 | 貞明皇后 | 公的場面 | | | 観桜会。裕仁皇太子、英国皇太子同伴。 |
| | | 賀陽宮佐紀子女王 | 肖像 | ○ | | 結婚報道。山階宮と同一ページ。 |
| | 7 | 久邇宮良子女王 | 肖像 | ○ | | 結婚勅許を前に。 |
| | 10 | 山階宮妃佐紀子・賀陽宮妃敏子 | スナップ | ○ | ○ | 山階宮・賀陽宮と同伴。 |
| 1923 | 7 | 久邇宮良子女王・信子女王 | 公的場面 | ○ | | 四国・九州・関西旅行。三重県。 |
| | | 朝香宮妃允子 | 記念撮影 | | ○ | 船上での記念撮影。 |
| | | 久邇宮良子女王・信子女王 | スナップ | ○ | ○ | 自邸でテニスなど。 |
| | | 久邇宮良子女王・信子女王 | スナップ | ○ | | 四国・九州・関西旅行。登山等。 |
| | 8 | 久邇宮良子女王・信子女王 | スナップ | ○ | | 四国・九州・関西旅行。鹿に給餌等。 |
| | | 久邇宮良子女王・信子女王 | スナップ | ○ | ○ | 四国・九州・関西旅行。食堂車等。 |
| | 11 | 久邇宮良子女王・信子女王 | 記念撮影 | ○ | | 震災被災者に衣服制作。 |
| 1924 | 4 | 皇太子妃良子 | 公的場面 | ○ | | 皇太子同伴での結婚奉告。 |
| | 6 | 梨本宮規子女王 | スナップ | | | 下校後の自習、登校時の自動車乗車。 |




〈図 22〉「松平節子姫の御帰朝」（『婦女界』1928 年 8 月号）

〈図 23〉「秩父宮殿下御成婚奉祝号」（『アサヒグラフ』1928 年 3 月 19 日）

だが、彼女は会津松平家の末裔であるものの、父の松平恒雄が家督を継がなかったため、平民身分として扱われていた二九。その平民としての側面と〈図22〉などに見て取れるような「モダンガールとしての節子像は複合され、良子に代わる新たな対象として浮上していたのである。同時期の『アサヒグラフ』でも特集号が組まれ、〈図23〉にあるように同時代先端の風俗を体現する存在として節子は称揚されており、翌年のイベントでも〈図24〉のようにその姿は提示され続けることとなる。




〈図 24〉「天覧の光栄に輝く神宮競技大会」（『婦女界』1929 年 12 月号）

この背景としては、端的に皇后に対する撮影の困難さにとどまらず、改元前後で明確化した皇位継承に関する問題がかかわっているのではないだろうか。前述のように一九二五年一二月に照宮成子が生まれ、一九二七年九月に久宮祐子が生まれるものの急逝し、その後も裕仁と良子のあいだには女子が続いて誕生しており、昭和改元の段階で二人の間には皇位継承者は生まれていなかった。ゆえに皇位継承順位第一位は一九三三年一二月・継宮明仁誕生までは年長の弟宮である秩父宮雍仁にあったのである三〇。所功が指摘しているように同時代において良子は「女腹」であるという風説が流れており、側室制を廃止するなど裕仁の主導によるヨーロッパでの知見を活かした宮中改革の動向が実質的に皇位継承の〈危機〉を招来していたことが問題視されていた三一。そもそも戦間期はデモクラシーや大正天皇の病状、皇位継承の不安定さなど皇室の〈危機〉が浮上していた時期であり、これらの複合的な要素によって相対的に若年且つ直系の皇族と皇族妃のクローズアップは生起していたと考えられる。

〈図 25〉「御書斎における秩父宮殿下」（『婦女界』1927 年 3 月号）

では、そのような状況の中で男性皇族、とりわけ大正天皇直系の昭和天皇の弟宮たちは女性雑誌においていかに表象されていたのだろうか。〈図25〉では、モダンな青年紳士としての秩父宮がグラビア写真として掲載されているほか、『婦女界』ではないものの『主婦の友』では酌婦稼働契約を結ばされた部下の水兵の妹を下賜金で救う高松宮が描かれるなど三二、一種のヒーローとして青年

皇族たちが表象されていたことが看取される。すでに茂木謙之介は、皇族が天皇と比してメディアにおいて自在な表象が可能であり、それが実質的に近代天皇(制)を支えたと指摘しているが[三三]、ここまで検討を加えてきた改元後の皇族及び皇族妃の表象からは、改元で顕在化した皇位継承の問題のなかでメディアの欲望に柔軟に対応する姿を見て取ることが出来るのではないだろうか。

## 第三章　『受難華』の示すもの

改元をめぐる皇族表象の変化を探究する本稿の締めくくりとして、菊池寛の小説『受難華』を検討したい。『受難華』はここまで検討を加えてきた『婦女界』の一九二五年三月号～一九二六年一二月号に連載されていた、ちょうど改元に前後して人気を博した小説である。単行本は一九二五年九月に『受難華』上巻が、一九二六年二月に中巻が、そして一九二六年一一月には下巻がそれぞれ春陽堂から発売され、一九二六年一二月には一巻本『受難華』が文芸春秋出版部から発売されている。また一九二六年一二月に蒲田で牛原虚彦の監督作品として映画化、一九二九年三月には市村座で上演され、一九三二年一二月日活太秦でも山本嘉次郎監督作品として映画化されるなど、複数回に及ぶアダプテーションをも果たしたテクストである。

同テクストの梗概は以下のとおりである。女学生の寿美子・桂子・照子は卒業を前に、三人全員が結婚した一年後に三人で生活の報告をするという誓いを立てる。卒業後、寿美子は恋愛関係にあった妻子ある大学教員・前川と決別し、大阪の大銀行の息子・林と望まぬ結婚をする。照子は外交官の藤木と婚約状態だったが藤木は彼女と肉体関係を結んだ後、赴任地のパリで客死する。桂子は貴族院議員の父を持つ三井物産社員・守山と結婚するも夫がかつての恋人との間に子をなし、それを捨てていたことを知って実家へと帰るが、子供の誕生を機に守山と再出発する決意をする。照子は藤木と同僚だった望月と知り合い、結婚することとなるが新婚旅行先で処女ではないことが望月に露見し別れを告げられ、ちょうど東京に滞在していた寿美子夫婦に匿われる。寿美子は彼女を取り返す交渉に来た望月の使者と応対するが、その使者は前年に妻を亡くした前川であった。寿美子の仲介で照子は望月とやり直すこととなり、寿美子もパリへと留学する前川を見送り、その後夫との生活を決意する。

同小説は連載中の一九二五年一〇月号の読者投稿には「菊池先生の『受難華』なんていいのでせう、私はもう八度もくり返し読みました。中年の私でさへこんなですもの、若い方にはどんなであらうと思ひます」とあることからも窺えるように[三四]、同時代の読者に非常な人気を博していた。

先行研究としてはモダンガールの生活意識を反映したテクストとして評価する前田愛の論があるが[三五]、本稿の問題意識と関わるものとしては申河慶および森暢平のものを挙げたい。前者では前田論に対して雑誌メディアにおける消費のコードが物語を駆動していることを指摘するとともに新婚旅行と同時掲載された旅行記の行く先が同一であることを指摘しており[三六]、後者では登場人物たちによる新婚旅行の場所が一九二三年の良子の関西旅行の行く先と一致しており、その際の『婦女界』による密着取材を想起させる消費がなされていたことが指摘されている[三七]。たしかにこれらの言及はテクストにおける新婚旅行について、物語言説としての意味を解明してきたといえるが、両論とも物語内容とは十分に連関されて論じられておらず、その観点からの検討が望まれている。

では具体的に新婚旅行の物語内容を検討したい。手始めに寿美子の新婚旅行に関する記述をみてみたい。

> 新婚旅行は、新夫の希望としては、京都、伊勢山田、蒲郡、箱根、東京、日光といふ予定だつた。だが、寿美子は、それを嫌つた。彼は夫と一しょに、東京の土地を踏むことは、懐かしい魂の思ひ出をふみにじるやうに思つた。殊に前川との最初の会合であつた東海道線は、彼女にとつては神聖だつた。夫と一しよには乗りたくなかつた。彼女は、高松、琴平、別府、

宮島を選んだ。

ここでは、望まぬ結婚の結果、寿美子にとって新婚旅行が消極的な選択の結果であったことが明らかされ、その旅程は「尊敬しなければならぬ良人が自分より無学であることは、教養ある婦人にとつては、第一の悲劇だつた。／屋島、琴平、内海の美しい島々、夫の教養や趣味が分るにつれて寿美子の蜜月の気持は、いよいよ荒んだ」とあるように、夫の無教養に対して彼女が失望する契機としてはたらく。

つづいて照子の新婚旅行についてみてみたい。「披露宴が済むとその夕方二人は直ぐ新婚旅行の旅に上つた。／沼津から、蒲郡、宇治山田、京都、奈良と云ふ予定だつた」というこの旅行は以下のように彼女が処女ではないことを告白する場であり、望月との一時的な関係破綻を惹起するものとなっている。

照子は、口には出せないで泣きしきつた。／望月の顔色は見る／＼中に、蒼ざめ出した。「藤木君とですか。」／照子はかすかにうなづいた。／望月は、照子の傍から、身を退くと慄へながら、呆然と黙つてしまつた。／それから三十分ばかり、怖しい沈黙がつゞいた。／「私達は、もうこれ以上旅行する必要はありませんね。」／と望月は喘ぐやうに一言云つた。

この後、望月に捨てられた照子を寿美子は匿うわけだが、その姿について当時の読者は「弱い同性のために敢然と立つた寿美子、あゝそれは私たちのジヤン・ダークです。侮辱と因習に依つて女性の心の壘を囲む男性たちよ。白馬に跨がれる彼女の、白銀の征矢を胸に受け給へ」と肯定的にとらえ[三八]、寿美子たちの選択を支持している。

ここまでの引用からは、これらのハネムーンが物語の中で決してポジティヴなものとして位置づけられていないという事が確認できたが、ここで想起しておきたいのはこの旅行先が良子による結婚前の家族旅行の場所として、『婦女界』で執拗に報道された場所だったということである。加えて大阪毎日新聞による記録に「久邇宮良子女王殿下が東宮妃として御入内遊ばされるに就いて久邇宮御一家打揃はれて、曩に東宮殿下が行啓遊ばされた関西各地を大正十二年五月四日から丁度一ヵ月間御巡遊になつた」とあるように[三九]、これらの諸土地は先に裕仁皇太子の踏破した場所とする報道があったことからは、この物語が皇族たちの婚姻を想起させつつ、それを遂行的に裏返すように構成されていることを示しているということができよう。

また、同テクストには天皇(制)を相対化するような言説がほかにも埋め込まれている。寿美子の愛人である前川が法政大学の教員にして「大原研究所」との関りが示唆されるところからは、明示されてはいないものの彼は恐らくはマルクス主義経済学についての研究者であり、そのことは寿美子はその講演を聞きに行く際に、銀行家の息子である夫から「社会主義とでも間違はれる」とたしなめられていることからも傍証できる。同誌では後に青野季吉が「メーデーと無産政党の話」を寄稿しており[四〇]、翌月号の読者投稿に「「メーデーと無産政党の話」の記事は、私が殊に知りたいと思つてゐたものですので、本当に嬉しうございました。私は四五年前から、ふと政治に興味を持ち始め、御誌にも早く政治の記事が掲載されることを待つて居りましたのです」とあることからも明快なように[四一]、読者から好意的に受け止められていたことがわかる。

では、これらの天皇(制)を相対化するかのような物語をいったいどのようにとらえればよいのだろうか。物語の結末を確認してみたい。

それを見た刹那、前川は横浜の不当に残した彼女が、つい目の前に立つてゐるやうな気がした。／「寿美子さん。寿美子さん。」／彼は我を忘れて、セーヌの川波に、さう叫びかけた。／この物語は、これで了る。結末を求むる人あらば、作者は答へるだらう。真の人生に結末のないごとく、この

物語にも、亦結末はないと。

三組の夫婦たちが既存の夫婦関係へと逢着したのち、パリへと留学した前川が遠く日本に住む寿美子に対して虚しく呼びかけるシーンに続いて、語り手が人生と同様に「この物語にも、亦結末はない」と述べて締めくくる。ここでは、一見すべての夫婦が「近代的夫婦」の規範に極めて近似したモノガミックな関係性に落着したかのように見せかけつつ、その破綻の芽を提示して閉じられており、いうなれば結論が宙づりにされたまま、それぞれの夫婦がその後も果たして関係を保ちつづけるのか否かについて明言が避けられているといえるだろう。

このように考えたとき、同雑誌における婚姻の意味は再度考慮しなければならない。一九二五年四～六月号に連載された中村武羅夫「わが貞操観」では生殖が結婚の第一義ではないと主張し、一夫多妻制への批判を試みている四二。かかるテクストが提示される傍らでそれとほぼ同時期に掲載された「山階宮梨本宮四殿下拝写の記」（『婦女界』一九二五年九月号）では以下のように皇室内の婚姻が寿がれている。〈図26〉

規子女王殿下は、ずつと以前から飛行機の研究に御熱心でなか／／御造詣深くいらせられます。従つて此の度、同じその道の御達人でいらせらる空の宮様と結婚遊ばされる御事となつたのは、此の上もなき御良縁で誠に御目出度き極みでございます。

ここで留意せねばならないのは、そもそもこれらの皇室内の婚姻がおしなべて天皇の〈スペア〉の用意という意味を絶えず持ち続けていた、ということである。いわば生殖に拘束されざるを得ない婚姻関係として在る皇室内の結婚と

〈図 26〉「山階宮梨本宮四殿下拝写の記」（『婦女界』1925 年 9 月号）

〈図 27〉「原阿佐緒女史」（『婦女界』1925 年 9 号）

そのような結婚を相対化する言説は踵を接して展開されていたということができるのだ。なお、この〈図26〉について、その裏面に配置されていたのが石原純と「愛欲の生活」を送っていると説明がなされた原阿佐緒の写真であったことは見逃してはならない〈図27〉。即ち、斯かる雑誌においては、皇室の婚姻を寿ぐという枠組みを提示しつつ、それを相対化し、時には戯画化するかのような言説があり得ていたのだ。『受難華』をその文脈に置きなおしたとき、大正末から昭和初期という皇室の危機的状況を背景とした一種〈危うい〉表現を読むこともまた可能なのではないだろうか。

## おわりに

以上、改元前後の雑誌『婦女界』における良子の表象を中心として検討を行ってきた。

先行論でこれまで提示されてきた「モダンガール」から「国母」へという良子イメージの枠組みは決して誤りではないものの、『受難華』にもみられるように『婦女界』という雑誌においては、先行論の指摘するような皇室の結婚を「模範的」「理想的」と一元的に回収する事の困難があったことは見逃せない。

また改元後においては皇后像が平板化していったが、そこには直系皇嗣の不在と皇族および皇族妃のクローズアップという問題系が横たわっていたことは重要である。その背後には読者による皇室「平民」化への期待とメディアによるその欲望の回収とがあった。

無論これらの雑誌や作家に天皇(制)を批評したいという明確な意図があったとはいい切れないと思われるが、雑誌的に読者に「受ける」ものを選び取っていった結果、その欲望が近代天皇(制)の〈危うさ〉を呼び込んでいたともいいうるのではないだろうか[四三]。

これらの検討からは改元という画期の設定に際して、天皇制をめぐる〈危機〉の顕在化という問題があったことが浮き彫りとなる。鈴木正仁は「「元号」は、天皇個人の可死的肉体を起点として測られ、語られる」と指摘しているが[四四]、まさに改元は天皇(制)が天皇という直系男子の、滅びゆかざるを得ない肉体に依存しているという〈危うさ〉を露わにするものなのだ。しかし、そこで同時に見逃してはならないのは、共起的に皇位継承についての問題が浮上するという事ではないだろうか。先代の天皇の死による改元は不可避的に「その次」の機会についての想像力を惹起する。そのとき皇嗣としての男性を産み出すという問題をめぐって女性に依存するシステムとしての天皇(制)のいびつな構造が暴露されるのであり[四五]、昭和改元においてはそれが女性雑誌においてひそやかに展開していったということが出来るのである。

付記　本稿は日本近代文学会二〇一八年度秋季大会（於岩手県立大学）でのパネル発表「昭和改元と女性たち」における報告内容をもととしたものである。会場内外で賜ったコメントの数々に対して感謝の意を表したい。なお、この研究成果はJSPS科学研究費（18H05624）の助成を受けたものである。

一　吉見俊哉「メディア天皇論の射程」（『世界』五八四号、一九九三年七月）
二　若桑みどり『皇后の肖像』筑摩書房、二〇〇一
三　片野真佐子『皇后の近代』講談社、二〇〇三
四　原武史『皇后考』講談社、二〇一五
五　森暢平「大正期における女性皇族像の転換――良子女王をめぐる検討」（『成城文藝』二三六号、二〇一六）
六　河西秀哉「総力戦体制のなかの香淳皇后」（森暢平・河西秀哉編『皇后四代の歴史』吉川弘文館、二〇一八）
七　日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第五巻（講談社、一九七七）より作成
八　前掲森二〇一六
九　水野新幸「破格の御優遇を蒙った本社の活動写真班久邇宮御巡遊に扈従して」（『大阪毎日新聞活動写真史』大阪毎日新聞社、一九二五）
一〇　「御勉強室に於ける規宮様」（『婦女界』一九二四年六月号）

一一　「皇族から臣籍へ下られた方々の愛と光に満ちた御家庭」（『婦女界』一九二七年一月号）

一二　坂本佳鶴恵「戦前期女性雑誌における口絵写真の分析」（『人文科学研究』第一〇号、二〇〇四）

一三　成婚前の表象に関しては前掲森二〇一六を参照のこと。

一四　かかるイメージについては青木淳子『近代皇族妃のファッション』中央公論新社、二〇一七を参照のこと。

一五　野上俊夫「壓制結婚と自由結婚」（『婦女界』一九二四年四月号）

一六　前掲若桑二〇〇一ほか

一七　前掲青木二〇一七

一八　千葉亀雄「婦人界時評」（『婦女界』一九二六年二月号）

一九　小野縣人「内親王御生誕に絡はる新聞記者の苦心」（『婦女界』一九二六年二月号）

二〇　楠谷遼「マスメディアにおける天皇・皇族写真」（河西秀哉編『戦後史の中の象徴天皇制』吉田書店、二〇一四）

二一　ただし周知のようにこの時誕生したのは成子という女性であり、かかる欲望が十全に満たされたとは言い難いことには注意を要する。

二二　茂木謙之介『表象としての皇族　メディアにみる地域社会の皇室像』（吉川弘文館、二〇一七）

二三　久我通「先帝陛下崩御前後に於ける葉山御用邸の御模様を拝して」（『婦女界』一九二八年二月号）

二四　太田菊子「新帝両陛下の御還幸啓を東京駅ホームに迎へ奉るの記」（『婦女界』一九二八年二月号）

二五　小野縣人「新帝御還幸の鹵簿を拝して」（『婦女界』一九二八年二月号）

二六　「編集室より」（『婦女界』一九二八年六月号）

二七　近代天皇（制）における慈恵主義については遠藤興一『天皇制慈恵主義の成立』学文社、二〇一〇を参照のこと。

二八　水上逸造「秩父宮妃に御決定の松平節子嬢生ひ立ちの記」（『婦女界』一九二八年三月号）

二九　なお、成婚に際しては家督を継いだ叔父の松平保男の養女となることで皇室典範の規定を満たしている。

三〇　かかる状況を本稿執筆時の二〇一八年一一月現在の所謂「生前退位」を目前に控えた状況とアナロジカルに語ることも可能であろうが、別稿を期したい。

三一　高橋紘・所功『皇位継承』文春新書、一九九八

三二　柳田きゑ子「高松宮殿下に淪落の街から救出された私の身の上」（『主婦の友』一九二八年七月号）

三三　茂木前掲二〇一七

三四　「前号を読みて」（『婦女界』一九二五年一〇月号）

三五　前田愛『近代読者の成立』（有精堂、一九七三）

三六　申河慶「《消費》と「モダンガール」」菊池寛『受難華』論」（『日本語と日本文学』四二号、二〇〇六）

三七　森暢平「皇太子妃良子の登場―国民教化と大衆人気のはざま」（森暢平・河西秀哉編『皇后四代の歴史』吉川弘文館、二〇一八）

三八　「前号を読みて」（『婦女界』一九二五年一一月号）

三九　「良子女王殿下関西御巡遊」（『大阪毎日新聞活動写真史』大阪毎日新聞社、一九二五）

四〇　青野季吉「メーデーと無産政党の話」（『婦女界』一九二八年五月号）

四一　「前号を読みて」（『婦女界』一九二八年六月号）

四二　中村武羅夫「わが貞操観」（『婦女界』一九二五年四～六月号連載）

四三　なお本稿の元となった日本近代文学会二〇一八年度秋季大会における口頭報告に際し、　田司雄氏より当該小説の実作者が横光利一であるとの指摘を受けた。当時『日輪』の映画化に際して不敬として発禁処分を受けており、斯かる動向を思考に繰り入れれば、『受難華』のもつ〈危うさ〉を意図的に狙われたものとして受けとめることが可能となるかも知れない。

四四　鈴木洋仁『「元号」と戦後日本』（青土社、二〇一七）

四五　ジェンダーと天皇制研究の近年の成果に関する近年のまとめとしては北原恵「学問領域とジェンダー　天皇制研究」（『ジェンダー史学』第一四号、二〇一八）がある。

原稿受付日　平成３１年１月２７日